

## 論文要旨

### 社内報編集組織における編集活動と編集担当者の裁量に関する研究

(指導教授：岸真理子教授)

法政大学経営学研究科経営学専攻

人材・組織マネジメントコース

田中秀人

本論文は、社内報の発行業務を担う編集組織の編集活動と編集担当者の裁量に関する研究である。成果物としての社内報に関心が集まる中で、社内報が発行されるまでの活動と編集組織において誰が何を決めているかに注目し、高評価を得ている社内報を発行することが可能な編集組織の活動と編集担当者の裁量との適合関係を調べた。

社内報の役割は、全社の経営方針を伝え、社員間や職場間の交流を促進し、職場からの声を全社に伝えることにある。そのため誌面上では、様々な企画を掲載している。社内報には、この発行業務を担っている編集組織が存在している。編集組織は、発行業務全体を管理する発行責任者と編集長といわれる編集責任者、各部門内の情報をまとめる編集委員、各地の情報収集や原稿依頼を行う通信員、外注先である編集制作会社、印刷会社で構成されている。

現在、社内報は、誌面の内容である企画や記事、そしてデザインの出来栄で評価されている。社内報の誌面刷新の際は、どのような誌面構成にするのか、それを検討することが基本になっている。新会社発足によって社内報を創刊する際も、どのような企画構成にするかに最大の関心が集まっている。本論文の意義は、こうした関心が大勢を占める中で、新しい視点からの考察を提示したことである。すなわち、特定の編集活動に対して編集担当者の社内報発行に関する裁量を、どのように適合させていくことが優れた社内報の発行に繋がるかについて検討した。

先行研究として、コンティンジェンシー理論に着目し、特にコンティンジェンシー要因として「技術」に着目した C. Perrow のフレームワークを応用し仮説の設定を行った。仮説の設定には、まず編集組織の活動を、ルーチンか、ノンルーチンかと、通常号の定期発行のみか、通常号に加えて臨時号・特別号を発行しているかという 2次元で、4つに分類した。この類型に適合する組織構造があると考え、そのうち、編集担当者である発行責任者と編集責任者の編集活動における裁量の違いに注目した。高評価の社内報の発行には、編集活動に応じて編集担当者のうち誰がどのような裁量を行っているのかについて、以下の仮説を設定した。

仮説 1. 評価の高い社内報を発行する編集組織では、編集の作業手順がルーチンで、通常号に加えて臨時号・特別号を発行している場合、発行責任者の裁量は小さくなり、編集責任者の裁量は大きくなる。

仮説 2. 評価の高い社内報を発行する編集組織では、編集の作業手順がノンルーチンで、

通常号に加えて臨時号・特別号を発行している場合、発行責任者と編集責任者の両者の裁量は大きくなる。

仮説 3. 評価の高い社内報を発行する編集組織では、編集の作業手順がノンルーチンで、通常号を定期発行している場合、編集組織は発行責任者の裁量が大きく、編集責任者の裁量は小さくなる。

仮説 4. 評価の高い社内報を発行する編集組織では、編集の作業手順がルーチンで、通常号を定期発行している場合、編集組織は発行責任者と編集責任者の両者の裁量は小さくなる。

調査にあたっては、高評価を得ている社内報を編集している組織 5 社を取上げ、編集担当者へのヒアリングを行った。調査結果の分析から、仮説は概ね支持された。高評価の社内報の実現には、編集活動に適した編集組織が必要となり、特に、編集活動と編集担当者の裁量をうまく適合させることが求められるということが明らかになった。